

杏林散策

「を」「に」の話

空知医師会 方波見 康雄

「を」「に」、おろそかにすべからず

「先生は、地域を生きる、という言葉をお使いになりました。地域に生きるなどの言い方と、どう違うのでしょうか」

昨年の秋、北海道地域医療研究会の基調講演をおえたあと、こういう質問をうけた。

「を」と「に」との違いは、要するに助詞の使い方の問題なのだが、講演の核心に触れている。質問者は、言葉ひとつにも注意深く耳を傾けていたのだ。

助詞は日本語の特徴のひとつ、目立たないが重要な役割をになう。世界の最短詩型・俳句では、助詞一字の工夫で、みちがえるような句になる。

芭蕉は指摘している。

<一句僅かに十七文字、一字もおろそかに置くべからず> (去来抄)

一字・一語にも表現の命が宿るとのことなのだ。



講演で、どうして「に」ではなく「を」にしたのか、準備に使った私家製ノート「なんでも書込み帳」をめくり、ふり返ってみよう。

まずは「に」から。

助詞「に」の多様な機能のひとつに、一点を限定して示す働きがある。俳句ではどうだろうか。

てっぺんに またすくい足す 落葉焚(藺草慶子)

足下で焚く落葉を見下ろしての一句だ。

落葉焚きで赤々と燃えさかる炎。燃え崩れる炎の上に、また落葉をつぎ足すと、いちだんと強まる火勢。

「に」によって、足下に見下ろす焚火の位置や大きさに視点が絞られ、情景が鮮明にクローズアップされている。「に」ではなく「てっぺんへ」とすると、輪郭がぼやけ迫力も弱まる。

「を」はどうだろうか。

この助詞には、動作の継続している状態や時間の経過と持続を示す働きがあるようだ。

元日を かるくをり 雲浮くごとく (森 澄雄)

元日をゆったりと過ごすさま、雲を浮かべた初空のおおらかさ。「を」が、悠揚な時間と空間を巧みに描き出している。

永劫の如し秋夜を点滴す (日野草城)

秋の夜長に点滴を受ける患者の、複雑微妙な心象が、しみじみと伝わってくる。脇役「を」の洪さが句の彫を深めている。



「に」と「を」の違いを、さし当たり、「に」は視点を一点に集中させる働きがあり、「を」は視野に広がり

を持たせる機能がある、と要約しておこう。

俳句に限らず、和歌・短歌などの伝統詩型や文芸あるいは日本語表現ではすべて、「てにをは」助詞の役割が大きい。その一文字一語が韻律を刻み、他の言葉と共振して、全体に奥行きと味わいをもたらす。

芭蕉の指摘「一字もおろそかに置くべからず」、やはり含蓄が深い。

「を」から見た医療とは

助詞「を」と地域医療とのかかわりは、どうだろうか。

地域医療を、「地域に根をおろす医療」「地域に根を張る医療」と定義すると、まず求められるのは、広がりのある視野、つまり「を」の意味合いを活かすことだろう。講演のなかで「地域を生きる」としたのも、「根をおろす・根を張る」の「を」が医療者としての基本的スタンスと考えたからだ。

「を」がひろげる地域医療の世界は多様で多彩だが、ここでは「視野」を話題にしておこう。

ある人が診療に訪れる。彼・彼女は医師の前にすわったとたんに患者に変身させられる。医師によっては、患者どころか、ただの“疾患”という名の記号的存在としか見ない事態も出て来る。患者もまたあえて、その事態に甘んずることもある。だが心境はたぶん複雑だろう。

病院・診療所から外に出ると、彼・彼女は“患者”や“疾患”の衣を脱ぎ捨て、ももとの自分に立ち返り、職場や家にもどる。隣近所や街の習俗と雰囲気、世間体などの人間模様の渦に入り込み、喜怒哀楽の日常生活を繰り返す。

そういう彼・彼女にさらに、地域の環境や自然の景観・生態系などが、微妙な陰翳を添える。国の医療政策なども、目には見えない形で複雑に絡んでいるはずだ。

「を」の医療は、椅子にすわる患者の背後に広がる多様な重層性を、どこまで広く深く診るかという、その医師の洞察力に関わってくる。精進すれば培われるが、完璧な期待は無理な話だ。

「を」は、マイクロ世界にも広がる。患者である彼・彼女の生命は、細胞からゲノムとDNA・分子・原子そして素粒子やニュートリノへと連環していく。

ニュートリノはビッグバンによって飛び出した大宇宙の断片だ。彼・彼女は、その断片を宿している。近ごろ話題の「CP対称性の破れ」も「ダークエネルギー」「ダークマター」とも無縁ではない。

宇宙創世から約137億光年、地球誕生からほぼ46億年、生命出現からおよそ40億年。その途方もない時間・空間を光背にした彼・彼女が、患者として目の前にすわるのだ。

診療のおり、広大かつ深遠な「を」の広がり、ときには目を向けるのもいいのではないか。

サンテグジュペリ『星の王子さま』のなかで、キツネは王子にこう言う。「こころで見なくちゃ、ものごとはよく見えないよ。かんじんなことは目に見えないんだよ」

助詞「を」が示唆する視野の広さと複眼的視線、味わいが深い。医療者も、一字一語やはりおろそかにはできない。